

ナシ語ローマ字表記法の 作成と変遷

黒澤直道

1. はじめに

ナシ族（納西族）は、中国雲南省の西北部、麗江市を中心とした地域に居住する、人口約32万人の少数民族である。ナシ族の話すナシ語は、系統的にはシナ・チベット語族チベット・ビルマ語群のイ語（彝語）系に属し、漢民族の漢語とは全く異なる言語である。

古くから漢民族文化の影響を強く受けたことで、現在のナシ族のほとんどはナシ語と漢語のバイリンガルとなっている。とはいえ、漢民族とは異なるナシ語を話し、独特の伝統文化を持つという点で、ナシ族は独自の民族意識を持っている。

ナシ語には複数の文字があるが、その中で現在のナシ語を記す上で使われているのが、「納西族文字方案」と呼ばれるローマ字による表記法である。現地では、現在もこの表記法を用いて書かれた書籍の出版が綿々と続けられている。この表記法の作成には紆余曲折があるが、当初の資料が入手しにくいこともあり、表記法の細部にわたりその変遷を辿った研究は、これまでほとんど行われていない⁽¹⁾。そこで本稿では、筆者がこれまでに入手した資料から、「納西族文字方案」の作成の経緯と変遷をたどり、その全体像を明らかにすることを試みる。

2. ナシ語の文字・表記法

ナシ語には、伝統的な数種の文字と、近代になってから新たに作成されたローマ字を用いた表記法がある。伝統的な文字としては、主にナシ族独自の宗教、トンバ教（東巴教）の祭司（トンバと呼ばれる）が執り行う儀礼の経典に使われるトンバ文字（東巴文）と、同じく経典に用いられるゴバ文字（哥巴文）がある。またこの他にも、ラコ文字（ラカ文字）⁽²⁾などがあるとされるが、トンバ文字の変種であると考えられる。

近代に新たに作成された文字（表記法）には、早くは1930年代にキリスト教宣

教師スハルテンによって作られた文字がある。しかし、ナシ族の中にキリスト教は広まらなかったことから、その後は廃れてしまった。1949年の中華人民共和国成立以降には、1950年代の社会歴史調査において、ナシ語の調査が大々的に行われ、その成果を基礎としてローマ字による新たなナシ語の表記法が作成された。

この表記法は、「納西族文字方案」などと呼ばれるが、現地のナシ族の間では、漢語の発音表記法である「漢語ピンイン (漢語拼音)」になぞらえて、「ナシピンイン (納西拼音)」と呼ばれることが多い⁽³⁾。しかし、当初からこの表記法の名称にはやや混乱が見られた。最も早い資料である1957年の草案のタイトルは「納西族拼音文字方案 (草案)」であるが、後にこの表記法を用いて発行された『麗江納西文小報』1985年1月26日 (創刊号) 第1面では、その説明に「納西文字方案説明」と題され、さらに一つの文章の中でも「納西文字方案 (草案)」、「納西族文字方案 (草案)」と「族」の有無が異なる二つの名称で記されている⁽⁴⁾。

この表記法の日本語による名称については、簡便に「ナシ語ローマ字表記法」とするのが自然であるが、ナシ語の表記法でローマ字を使用したものには、他にキリスト教宣教師スハルテンによる文字などもあるため、他のローマ字表記法と区別する場合には、「納西族文字方案」、もしくは「納西族文字方案によるローマ字表記法」と記するのが適切と思われる。

3. ナシ語ローマ字表記法作成の経緯

中華人民共和国成立後の少数民族に対する言語政策とその経緯については、複数の先行研究に述べられている⁽⁵⁾。そこでは、ソ連の民族政策を参考にしながら、言語調査に基づく標準語の基礎となる方言の選定、民族の識別、それまでに使われていた文字の改革や、文字のない言語の文字創製が行われていった。この時期の文字の使用状況についての分類では、ナシ族は、満州族、イ族、ミャオ族と共に、「元々文字はあるが、通用しない、或いはあまり通用しない四つの民族」の一つに数えられ、「文字が正確に言語を表せないため、一部の知識人は新文字の創立を希望している」と記されている⁽⁶⁾。

この流れの中で、ナシ語の表記法の作成を巡る動きには次のようなものがある。まず、1952年の初め、中央民族学院語文系 (後の少数民族語文系) に、最初の「ナシ語専業班」が開設された。ここでは言語学者傅懋勳の指導の下に「納西語拼音符号」が作成され、ナシ族出身で後に主要な言語学者となる和即仁が教材を作成した。その後、同学院には第二期の「ナシ語専業班」が開設され、言語学者馬學良の指導の下に、やはりナシ族出身で、後にナシ語やトンパ經典研究など多方面の業績を残した和志武が教材を作成した⁽⁷⁾。この教材は、後に同学院で使われた『納西語講義』の基になっていると思われる⁽⁸⁾。

1956年には、中央民族事務委員会と中国科学院により、全国的規模の少数民族

言語の調査が行われた。700人以上からなる調査隊は七つの工作隊に組織され、16の省と自治区に赴き、42の民族言語に対する調査を行った⁽⁹⁾。このうち、雲南方面を調査する第三工作隊の中にナシ語調査チームが組織され、チーム長を和即仁、副チーム長を和志武が務めた。このチームはナシ族居住地域内の42地点で、半年以上の言語調査を行った⁽¹⁰⁾。この大規模な調査の成果として、『納西語調査大綱』⁽¹¹⁾及び『關於納西語言文字問題的彙報』（『納西語調査報告』とも呼ばれる）が執筆され、さらに「納西族拼音文字方案（草案）」が作成された⁽¹²⁾。このうち『關於納西語言文字問題的彙報』は、後に出版される『納西族社会歴史調査（三）』（1988年）に、「納西族的社会歴史及其方言調査」というタイトルで、一部を改訂されて収録されている。ただし、「納西族拼音文字方案（草案）」は後に複数回改訂されたため、『納西族社会歴史調査（三）』では改訂後のものが『麗江納西文小報』創刊号（1985年1月26日）より転載されている。

1956年10月、一部の言語調査隊の隊長と関連分野を専門とする学者らは、貴州で民族文字の形式に関する会議を開き、その中でラテン文字を基礎とする少数民族文字は、文字形式の上で可能な限り漢語拼音方案（1956年2月に草案公表）と一致させることを確定し、同時に南方の各少数民族が選定できる字母表を作成した⁽¹³⁾。上述の「納西族拼音文字方案（草案）」の作成においては、この字母表が参考にされている。

1957年3月、「納西族拼音文字方案（草案）」は、雲南省少数民族語言文字科学討論会第一次會議で承認され、さらに中央民族事務委員会（北京）で批准され、試験的な実施が認められた⁽¹⁴⁾。翌1958年の前半には、「少数民族文字方案における字母設計五項原則」（1957年12月10日、國務院全体會議承認）と、1958年2月の第一回全国人民代表大会で公布された「漢語拼音方案」に基づき、「納西族拼音文字方案（草案）」が修訂された⁽¹⁵⁾。

しかし、ここまで順調に見えた少数民族の文字創製は、1957年の反右派闘争に始まる政治運動の中で停滯を余儀なくされた⁽¹⁶⁾。民族言語の文字創製は、民族間の違いを強調し、国家の統一を妨げるものとして批判の対象となった。1958年以降、雲南省ではナシ族を含む複数の民族の文字創製事業が停止された。そして1966年以降、中国全土に吹き荒れた文化大革命の中では、ほとんどの民族語に関わる事業が停止される状況となった。

文化大革命が収束して数年が経つと、1980年には北京で第三次全国民族語言文字科学討論会が開催された。この会議において、国家民族事務委員会は、1957年に批准された「納西族拼音文字方案（草案）」を含む複数の民族文字方案が有効であることを言明した⁽¹⁷⁾。翌1981年、雲南省民族事務委員会・雲南省少数民族語言文字指導工作委員会の拡大会議において、麗江納西族自治県における「納西族文字方案」の試験的实施が決定された⁽¹⁸⁾。これに従い、麗江県文教局と民族事務委員会は、「納西語拼音方案（草案）説明」を頒布した⁽¹⁹⁾。

1982年、雲南省民族事務委員会と民族語言委員会による拡大会議が開催され、元の納西族文字方案の修訂が提起され、昆明在住のナシ族学者によって修訂が行われた。そして同年には、納西族文字方案を用いた初めての新聞である『麗江報』が試験的に発行された⁽²⁰⁾。1983年に入り、この「第一次修訂方案」は麗江県人民政府で審議され、さらに麗江県人民代表大会で批准された⁽²¹⁾。

以上のような紆余曲折を経て、1985年には、納西族文字方案を用いた『麗江納西文小報』が試験的に発行され、同年12月に、『LILJAI BAL (麗江報納西文版)』が正式に創刊された。翌1986年には、ナシ語の教科書『語文 第一冊』、神話『創世紀』、民謡『牧象女』が刊行され⁽²²⁾、それ以降、教科書、トンバ文学、民謡、諺、科学・法律知識普及書、翻訳された公文書などナシ語の図書が続々と刊行されている⁽²³⁾。

4. ナシ語ローマ字表記法の変遷とその資料

ここでは、納西族文字方案によるローマ字表記法の変遷を、それが直接記された資料や、使用された教材などの情報とともに述べる。1957年以前の資料・教材については、入手が困難である。以下では、それぞれの表記法(案)の略称を括弧に入れて示す(各字母の音声については、次節の表を参照)。

①1957年作成の草案(‘57草案)

「納西族拼音文字方案(草案)」(雲南省少数民族語文科学討論会1957b)。これは1956年の大規模な言語調査の直後に作成された草案である。この資料は、後に「納西拼音文字的創制經過及其作用」『民族語文論文集』(和即仁2006)にも収録されている。

この草案は、ラテンローマ字(23字)を基礎としながら、国際音声記号3字(w, ə, ɜ)、キリル文字2字(Б, Г)、新たな1字(d)が含まれている。これらのラテンローマ字以外の文字の採用は、「一字一音」の原則に沿ったものである(ただし、完全な一字一音にはなっていない)。このうち、新たな文字dは、ナシ語においては鼻音前出有声閉鎖音[nd]に充てられているが、この文字は旧ソ連の少数民族言語の表記法で用いられたもので、やはりこの時期に作成されたチワン語の「僮文方案」や、ミャオ語の北方方言文字改革方案でも使われている⁽²⁴⁾。前年に貴州で開かれた民族文字の形式に関する会議で作成された字母表に含まれていると見られる。また、四種の声調の表示については、音節末にd、l、fを付加し(それぞれ調値が[21]、[55]、[13])、記号の無い場合の調値は[33]となる。

②1958年前半の修訂(‘58修訂)

1957年12月10日に國務院全体会議で承認された「少数民族文字方案における字

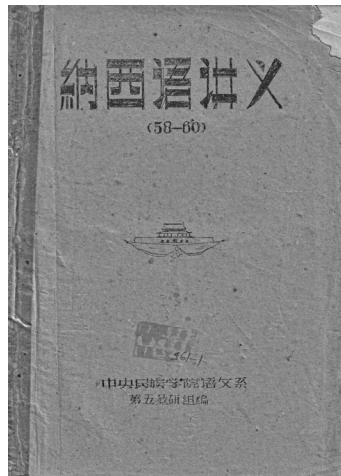
母設計五項原則」と、1958年2月に公布された「漢語拼音方案」に基づいて作成された'57草案の修訂である。後に出版された「納西拼音文字的創制經過及其作用」『民族語文論文集』（和即仁2006）に収められている。

この修訂によって、'57草案の国際音声記号3字は、それぞれee, e, ssに、キリル文字2字は、それぞれbb, ggに、新たに作られた1字はddに変更され、字母が足りない場合に二文字で綴る方式が増加した。旧ソ連系の文字が排除されたことには、1950年後半に始まる中ソ対立の影響があると見られる。また、eを[a]の表記に充てたのは、漢語拼音方案に近づけたためである。この他にも、漢語拼音方案からj, q, x [tɕ, tɕʰ, ɕ] の表記が採用され、それに伴う調整（jに充てられていた [ndz] にzzを充てることなど）が行われている。

③中央民族学院『納西語講義』に見られる方式（'60講義）

和志武によって書かれ、中央民族学院で用いられたナシ語の教科書『納西語講義（58-60）』（中央民族学院語文系第五教研組編1960）に見られる表記法である。本書の「前言」には、『納西語講義』は1956年入学の民族班のナシ族学生に用いたものであるが、当時、教員が言語調査に参加したため、その授業は1958年後半から「書きながら講じられ」、断続的に現在（1960年5月）に至っている（59年には実習のため一学期休止）、とある。

本書に示された表記法は、1958年の修訂案とはかなり異なる体系となっている。ただし、この方式が使われているのは第二章「語音」の第一節「麗江納西語的音位系統」の冒頭部分であり、民謡や諺などを収録した第四章に見られる多くのテ



『納西語講義（58-60）』

クストは、子音・母音は第二章の冒頭の体系と同じであるが、声調の記述のみ'57草案と同じ方式で記述されている。

'57草案やその他の体系と最も異なる点は、有声閉鎖音と鼻音前出有声閉鎖音を分け、それぞれに独立した記号を与えている点である (bb/mb, dd/nd, gg/ngg, jj/nj, zz/nz, zr/nr)。この2系列の子音については、1956年の言語調査の後にまとめられた資料では、当時の麗江納西族自治県の中心地で話される大研鎮方言においては区別が存在しないが、一方、大研鎮を取り巻く広大な農村部で話される麗江壩方言と、大研鎮の北方の宝山州方言において対立があるとされる⁽²⁵⁾。納西族文字方案は、大研鎮方言を標準音として作成されたため、'57草案とそれに続く案ではこの区別は取り入れられなかった⁽²⁶⁾。『納西語講義』の前言には記されていないものの、こうした特徴は1950年代前半に中央民族学院で作成された教材から受け継がれている可能性がある⁽²⁷⁾。

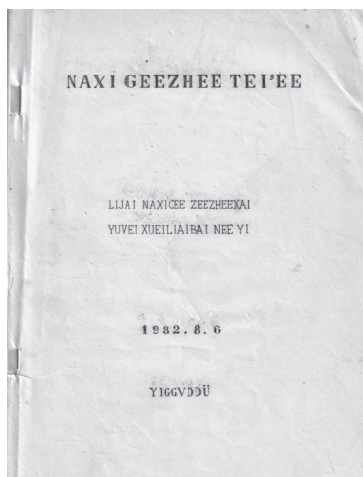
④1980年代初期の方式 ('80初期)

1980年に'57草案が有効であることが確認されて以降、1983年の修訂までの間に見られる方式である。1983年5月7日発行の『麗江報納西文版』第3期の第1～2面には、「納西文字方案説明」としてこの方式が示され、その前後に発行された号で使用されている。この方式では、有声閉鎖音と鼻音前出有声閉鎖音の対立は取り入れられていないが、当該の子音は綴りとしては鼻音を意識したものとなっている (nb, nd, mg, nj, nz, mz)。また、声調の表記については、'58修訂とは大きく異なり、'60講義に見られる付加記号を使う方式に沿っている (ただし [33] 調のみ記号なしで表す)。

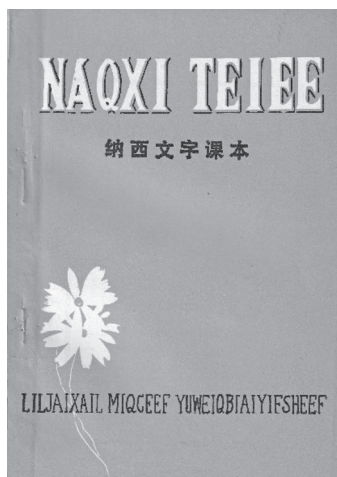
この方式を用いて作成された教材に『NAXI GEEZHEE TE'EE』(麗江納西族自治県語文訓練班印 (油印版)、1982年8月6日)⁽²⁸⁾がある。裏表紙には、編者として和志武、李即善のナシ語表記による名前 (Hōzhèe'v, Lizìsài) が見える。和志武によれば、1982年7月に第一回の「納西語文訓練班」が開かれ、和志武と李即善が参加したとされているので⁽²⁹⁾、これはその折に編まれた教材と思われる。本書では冒頭に文字と発音の説明があり、以降は民謡、会話文、諺、昔話などの多くのテキストが収められている。

⑤1983年の修訂 ('83修訂)

1982年に提起され、昆明在住のナシ族学者によって行われた修訂で、翌1983年の麗江県人民代表大会で批准されたもの。これ以降の出版物は、基本的にこの方式に従って書かれている。実はこの修訂は、子音、母音、声調の表示方式については、'58修訂と全く同じものとなっている。'58修訂以降、'60講義や'80初期に見られた異なる方式による不統一を整理し、今一度、初期の案に立ち返ったものとも言える。こうした不統一には、1957年の反右派闘争からその後の文化大革命を



1980年代初期の方式による
『NAXI GEEZHEE TEI'EE』



1983年の修訂後の『NAXI TEI'EE
(纳西文字課本)』

経た長期に亘る政治的混乱による空白が影を落としていると言えよう。

この改訂で作成された方案の文書そのものは未確認だが、この修訂はその後の幾つかの資料に掲載されている。このうち、1985年1月26日発行の『麗江納西文小報』創刊号には、「纳西文字方案説明」があり、この記事はその後に出版される書籍にも引用され、現行の納西族文字方案によるローマ字表記法の基本的な資料となっている。1988年に出版された『納西族社会歴史調査（三）』では、「四、納西族文字方案」として収録され⁽³⁰⁾、その冒頭には「『麗江納西文小報』創刊号に基づく」と書かれている。

ただし、『麗江納西文小報』創刊号の記事は、当初作成された修訂案を一般向けに簡略化したものと思われる。1992年に出版された『中国少数民族文字』には、「纳西文」として当初の修訂案に近いと思われる紹介がある⁽³¹⁾。また、1985年に出版された『納西語簡志』でも、文章記号の表記法など一部が省略されているが、「(三) 拼音文字」としてこの表記法を示している⁽³²⁾。

実は、当初の1983年の修訂案と『麗江納西文小報』創刊号の記事とでは、表記規則に異なる部分がある。当初の修訂案では、vの記号に単母音 [y]、有声の唇歯摩擦音 [v]、軟口蓋の有声摩擦音 [ɣ] の三つを充て、環境によって読み分けていた。『麗江納西文小報』創刊号では、ここから軟口蓋の有声摩擦音 [ɣ] を除外し、さらに有声の唇歯摩擦音 [v] を記す場合には大文字で綴るという規則を追加した。また、当初の修訂案には、かつての'57草案に見られたような大文字、連写規則、移行規則（改行）の記述が含まれていたが、これらは「漢語拼音方案

を参照」として一律に省略されている（詳細は、次節を参照）。

以上の他には、1987年の『納西語基礎語法』でも「第一章 語音」として、この表記法に基づいた解説を示し⁽³³⁾、2000年6月8日に発行された『麗江納西文報』（『麗江納西文小報』より名称変更）第77期の第1面では、「来学納西文」として、ナシ語の説明を付してこの表記法を改めて紹介している。これら二つについては、『麗江納西文小報』創刊号の記事に従った記述となっている。

1983年10月の日付がある『NAQXI TEITEE（納西文字課本）』は、おそらくこの修訂の後、最初に作成された教材であると思われる。扉にはLIZIQSAIL（李即善）編とあり、LILJAIXAIL MIQCEEFYUWEIQ BIAIYIFSHEEF（麗江県民族語文編訳室）の表示がある。内容は、子音、母音、声調や表記規則の説明・練習と、会話文1編、民謡4編が含まれている。

⑥近年の修訂案（'08修訂案）

1983年の修訂以降、納西族文字方案には長らく大きな改訂が行われて来なかった。2008年に至って、玉龍納西族自治県の民族宗教事務局は「納西語拼音文字方案（修訂草案）建議稿」を作成した⁽³⁴⁾。この改訂案は、その後も政治的にオーソライズされることなく、現在に至っている。ただ、一部の表記方式については、部分的に出版物に取り入れられているものがある。

この修訂案では、'60講義を除くこれまでの方式では記号が与えられていなかった軟口蓋の有声摩擦音 [ɣ] に、hhの表記が充てられている。この子音は、組み合わせる母音が二つしかなく、出現する環境が限定的であることから、'57草案の段階から特定の記号は充てられていなかった。なお、'60講義では、有声の唇歯摩擦音 [v] および単母音 [ɤ] と同じ記号vを充て、環境によって読み分ける方法を採用している。1980年代中盤以降に進められたナシ語書籍の出版の中で、軟口蓋の有声摩擦音 [ɣ] に記号が充てられていないことは、現場の担当者には不都合と感じられていたのであろう。一方、次に述べる和学光氏の案では、この子音にhhの表記が充てられており、それがこの修訂案に取り入れられたと見られる。この他には、'57草案ではngi、その後の方式ではniの綴りが充てられていた子音 [ŋ] をnjとすること（[n] との区別を明確にするため）、また、主に擬声語・擬態語の表記に用いるan,on,en,in,un,vn,rnを別途加えている点が特徴である。

⑦和学光氏の表記案（'09語文）

1990年代からナシ族文化の研究・普及活動に携わり、「麗江市納西文化伝習協会」を主宰する和学光氏が、『納西語文講義 創刊号』で示している表記案である⁽³⁵⁾。これまでに見た表記案や修訂案が、基本的に現地政府の担当部門によって行われたのに対し、この案はそれとはやや距離を置いた文化伝承活動から生まれたものである。そのため、これまでの案とはかなり様相を異にする。最大の特徴は、有

声閉鎖音と鼻音前出有声閉鎖音を区別し、さらに後者には無声閉鎖音で用いた記号を重ねる (pp, tt, kk, cc, jh, cr) などしていることである。

また、⑥でも述べたように軟口蓋の有声摩擦音 [ɣ] には hh の表記を充て、さらに子音 [ŋ] の綴りは nh とする。加えて、擬声語・擬態語の表記に用いると思われる vr, mm を母音に加えている⁽³⁶⁾。これらの追加の背景には、和学光氏が長く行ってきたナシ族の民謡や各種言語伝承の記録・継承活動において、表記で適切な字母がないことの不都合が実感されていたことがあると見られる。

5. 字母と表記規則の変遷

以下では、前節に述べた各資料に示された字母を、一覧にして示す。最上段は、子音・母音については国際音声記号 (IPA)、声調については調値である。'83 修訂については、広く公表された『麗江納西文小報』創刊号に示されたものに従う。

[子音]

IPA	p	p ^h	b	mb	m	f	v	t	t ^h	d	nd	n	l
'57草案	b	p	—	B	m	f	—	d	t	—	d̄	n	l
'58修訂	b	p	—	bb	m	f	—	d	t	—	dd	n	l
'60講義	b	p	bb	mb	m	f	v	d	t	dd	nd	n	l
'80初期	b	p	—	nb	m	f	—	d	t		nd	n	l
'83修訂	b	p	—	bb	m	f	v	d	t	—	dd	n	l
'08修訂案	b	p	—	bb	m	f	v	d	t	—	dd	n	l
'09語文	b	p	bb	pp	m	f	v	d	t	dd	tt	n	l

IPA	k	k ^h	g	ŋg	ŋ	x	ɣ	tɕ	tɕ ^h	dz	ndz	ŋ	ɕ
'57草案	g	k	—	Γ	ng	h	—	gi	ki	—	r i	ngi	hi
'58修訂	g	k	—	gg	ng	h	v ⁽³⁷⁾	j	q	—	jj	ni	x
'60講義	g	k	gg	ngg	ng	h	v ⁽³⁸⁾	j	q	jj	nj	ni	x
'80初期	g	k	—	mg	ng	h	—	j	q	—	nj	ni	x
'83修訂	g	k	—	gg	ng	h	—	j	q		jj	ni	x
'08修訂案	g	k	—	gg	ng	h	hh	j	q	—	jj	nj	x
'09語文	g	k	gg	kk	ng	h	hh	j	q	jj	jh	nh	x

IPA	ts	ts ^h	dz	ndz	s	z	tʂ	tʂ ^h	dʒ	ndʒ	ʂ	ʐ
'57草案	z	c	—	j	s	ʒ	zh	ch	—	jh	sh	r
'58修訂	z	c	—	zz	s	ss	zh	ch	—	rh	sh	r
'60講義	z	c	zz	nz	s	ss	zh	ch	zr	nr	sh	r
'80初期	z	c	—	nz	s	sz	zh	ch	—	mz	sh	r
'83修訂	z	c	—	zz	s	ss	zh	ch	—	rh	sh	r
'08修訂案	z	c	—	zz	s	ss	zh	ch	—	rh	sh	r
'09語文	z	c	zz	cc	s	ss	zh	ch	rh	cr	sh	r

〔單母音〕

IPA	i	y	e	a	ɑ	o	u	ʊ	ʏ	ə	ɐ
'57草案	i	y	e	ae	ɑ	o	u	ʊ	v	ə	ər
'58修訂	i	iu	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er
'60講義	i	yu	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er
'80初期	i	ü	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er
'83修訂	i	iu	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er
'08修訂案	i	iu	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er
'09語文	i	iu	ei	ai	a	o	u	ee	v	e	er

〔複合母音〕

IPA	ia	iɑ	iə	ie	ye	ya	ue (ui)	ua	uɑ	uə
'57草案	iae	iɑ	iə	—	ye	yae	ue	uae	uɑ	uə
'58修訂	iai	ia	ie	iei	—	—	ui	uai	ua	ue
'60講義	iai	ia	ie	iei	yuei	yuai	uei	uai	ua	ue
'80初期	iai	ia	ie	iei	üei	üai	uei	uai	ua	ue
'83修訂	iai	ia	ie	iei	—	—	ui	uai	ua	ue
'08修訂案	iai	ia	ie	iei	—	—	ui	uai	ua	ue
'09語文	iai	ia	ie	iei	—	—	ui	uai	ua	ue

〔声調〕

調値	33	21	55	13
'57草案	なし	d	l	f
'58修訂	なし	q	l	f
'60講義	ā	ǎ	à	á ⁽³⁹⁾
'80初期	なし	ā	à	á
'83修訂	なし	q	l	f
'08修訂案	なし	q	l	f
'09語文	なし	q	l	f

以上のうち、vの記号はいずれも単母音 [y] の表記に充てられているが、'60講義のように同時に子音としての [v] の表記に用いているものもある。子音としての [v] が出現するのは漢語由来の借用語の中だけであるため、それをナシ語の表記体系に含めるかどうかによってこの差異が生じている。また、同じく大きな違いが生じている複合母音の [ye] と [ya] も、やはり漢語由来の借用語のみに出現する音声である。これをナシ語の表記体系に含めるかどうかによって字母の有無が生じている。

声調の表記については、'57草案の段階から音節末に一文字を付加する方式であったが、'60講義と'80初期のみ、母音の上部に付加記号を加える方式となっている。これはやはり、漢語拼音方案の声調表記法に合わせたものと見られる。また、'80初期では、単母音の [y] 及びこれを含む複合母音の表記において [ü] が使われており、これも同じく漢語拼音方案に合わせたものと見られる。しかし、このいずれの点も'83修訂では採用されず、'58修訂の方式に回帰している。

〔表記規則〕

以下に、各資料に見られる表記規則を纏める。番号については原文とは別に新たに付したものがあ。原文とは一部に表現の異なるものがあるが、規則の内容には変更を加えないよう留意した。

【'57草案】

〈大文字の規則〉

- (1) 各文の最初の文字は大文字とする。
- (2) 固有名詞の最初の文字は大文字とする。
- (3) 詩歌の各行の最初の文字は大文字とする。
- (4) 文のタイトル、標語、書名の最初の文字は大文字とする。

(5) 略語は大文字とする。

〈連写規則〉

- (1) 接頭辞は連写する。
- (2) 複音節語は連写する。
- (3) 複合語は連写する。
- (4) 連写により混淆が起る場合はハイフンを入れる。

〈移行規則 (改行)〉

単語が行末で終わらない場合は、ハイフンを入れて次行に移る。

〈文章記号〉

- (1) 文末に「。」を用いる。
- (2) 句末に「,」を用いる。
- (3) 並列する句に「;」を用いる。
- (4) 直接の陳述と引用に「:」を用いる。
- (5) 疑問文に「?」を用いる。
- (6) 感嘆、命令に「!」を用いる。
- (7) 並列、及び停頓に「、」を用いる。
- (8) 注釈に「——」を用いる。
- (9) 引用に「“ ”」或いは「' ’」を用いる。
- (10) 文中の注釈部分には「()」を用いる。
- (11) 省略に「……」を用いる。

【'58修訂】

(追加) 音節の区切りが曖昧になる場合に隔音記号 (') を用いる⁽⁴⁰⁾。

【'60講義】

記述なし。

【'80初期】

- (1) vで子音 [v] を表記する場合は、大文字 (V) とする。
- (2) iで始まる母音は、その前に子音が無い場合はyi、ya、yeのように綴る。
- (3) uで始まる母音は、その前に子音が無い場合はwu、wa、weのように綴る。
- (4) üで始まる母音は、j、q、nj、ni、xと組み合わせる場合は、上部の二点を省略できる。üで始まる母音は、その前に子音が無い場合は、yu、yue、yuaiのように綴る。

- (5) z,c,nz,s,szとzh,ch,mz,sh,rの母音記号にはeeを用いる。
- (6) 音節の区切りが曖昧になる場合には、隔音記号 (') を使う。
- (7) その他、大文字、連写、移行規則、文章記号などは、漢語拼音方案を参照。

【83修訂】⁽⁴¹⁾

- (1) vで子音 [v] を表記する場合は、大文字 (V) とする。
- (2) iで始まる母音は、その前に子音が無い場合はyi、ya、yeのように綴る。
- (3) uで始まる母音は、その前に子音が無い場合はwu、wa、weのように綴る。
- (4) iuで始まる母音は、j、q、jj、ni、xと組み合わせる場合は、iを省略できる。
iuで始まる母音は、その前に子音が無い場合は、yu、yue、yuaiのように綴る。
- (5) z,c,zz,s,ssとzh,ch,rh,sh,rの母音記号にはeeを用いる。
- (6) 音節の区切りが曖昧になる場合には、隔音記号 (') を使う。
- (7) その他、大文字、連写、移行規則、文章記号などは、漢語拼音方案を参照。

【08修訂案】⁽⁴²⁾

- (1) iで始まる複合母音は、その前に子音が無い場合はyi、ya、yeのように綴る。
- (2) uで始まる母音は、その前に子音が無い場合はwu、wa、weのように綴る。
- (3) iで始まる母音は、j、q、jj、nj、xと組み合わせる場合は、iを省略できる⁽⁴³⁾。
- (4) uiがそれだけで音節となる時はueiと綴る。
- (5) 年月日や常用の単語は、大文字で略記することができる。
- (6) 固有名詞の最初の文字は大文字とする。人名の姓と名の始まりも大文字とする。
- (7) 文と段落の最初の文字は大文字とする。
- (8) 篇名、書名の最初の文字は大文字とする。
- (9) 各句が一行となる詩歌の各行の最初の文字は大文字とする。
- (10) 文章記号については漢語文の方法を参照し、句点には黒点（ピリオド）を用いる。
- (11) 音節は連写せず、音節ごとに分けて書く。これにより隔音符 (') は不要となる。
- (12) vで子音 [v] を表記する場合に大文字 (V) で書く規則は廃止する（固有名詞の最初の文字を大文字とする規則と衝突するため）。

【09語文】

子音と声調記号が区別できなくなる場合には、隔音記号 (') を用いる⁽⁴⁴⁾。

以上の表記規則の中で注目されるのは、分かち書きと隔音符 (') の問題で

ある。'57草案では、連写規則として接頭辞や複音節語、複合語については、単語を一続きに書くことになっている。しかし、これら以外の助詞（さらに助詞が連続する場合）については特に明言されておらず、これを一続きに書くべきか否かということは、納西族文字方案でナシ語を書く者にとって最も頭の痛い問題となってきた。1980年代以降の改訂でも、これは特に表記規則として触れられることはなく、その中で出版事業が進められてきた。実際に出版されたナシ語書籍では、明確な規則は見いだされないものの、概ね接頭辞や複音節語、複合語については、単語を一続きに書くという'57草案や'83修訂の当初案に含まれる記述に従っているように見え、確かにその方が読みやすい⁽⁴⁵⁾。

しかし、'08修訂案では、この問題を根本的に回避するために、単語ではなく全ての音節にスペースを入れるという方法が提案されている。この方法に従うなら、'58修訂で示された隔音符号（'）も不要になることになる。実際、2000年代以降に出版されたナシ語の『語文』の教科書などにおいてはこの方式が採られているが、一見して単語の区切りが分からないため、読みにくいものとなってしまう。記述する側にとっては分かち書きで悩む必要がなくなるため便利な方式であるが、読む側の不便が感じられる以上、やはり単語や助詞ごとの様々なケースに合わせて、分かち書きの細かなルールを立てる必要があると思われる。

また、上記のうち、'80初期以降に見られるi、u、ü（iu）で始まる母音に関する一連の規則は、漢語拼音方案の表記規則に合わせたものである。

'57草案では、大文字、連写規則、移行規則、文章記号とかなり細かい規則を立てていたが、以降の改訂では細かな部分は漢語拼音方案の方式に従うこととなり、ナシ語独自の表記規則は少なくなった。ただし、近年の'08修訂案では、'83修訂以降の実際の出版事業において見出された問題点が補足もしくは修正されている。

6. おわりに ——ナシ語ローマ字表記法の今後

以上に見たように、納西族文字方案によるローマ字表記法の成立には紆余曲折があり、特に1957年の反右派闘争や、その後の1960年代に始まる文化大革命時期の混乱においては、大きな負の影響を被った。それは1980年代初期に見られた不統一にも影を落としている。それでも1980年代半ばから、この表記法を用いた新聞、小学校用教科書、科学知識普及図書、神話、民謡、諺のテキストなどが綿々と出版されてきた。

ナシ族は、雲南省西北部の少数民族の中では比較的漢語の浸透が進んでおり、1980年代までは自民族の言語に対する意識は希薄であった。しかし1990年代以降、ナシ族の居住地で急激な観光地化が進み、外来人口の流入で現地の環境が激変する中、自民族言語の消失という危機感が生まれてきた。現在、ナシ族の伝統文化

である神話や民謡、童謡、諺などの言語伝承を記す手段として、納西族文字方案によるローマ字表記法は欠かせないものとなっている⁽⁴⁶⁾。その意味でも、現場の経験を踏まえた、適切な表記法の改訂が望まれるところである。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」（基盤研究C（18K01018）、研究代表者・山田勅之）及び、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築」による研究成果の一部である。

参考文献

- 傅懋勳1959「新中国少数民族创制改革文字和发展民族标准语的工作」中国科学院代表团,1959年9月。
- 傅懋勳1983「少数民族创制文字在字母设计上和汉语拼音方案求同存异」『民族語文』1983年第1期, pp. 1 - 3。
- 広西僮文工作委员会翻訳1958『僮文方案』広西民族出版社。
- 貴州省民族語文指導委員会編1957「苗語北部方言文字改革方案（草案）」『苗族語言文字問題科學討論會彙編』1957年10月, pp.150-213。
- 和即仁2006「納西拼音文字的創制經過及其作用」『民族語文論文集』pp.144-157, 雲南民族出版社。
- 和學光2009「納西語文講義 創刊号」麗江市納西文化伝習協會。
- 和學光2013「納西語漢語詞典（試用）（一）～（六）」麗江市納西文化伝習協會。
- 和志武1986『創世紀』雲南民族出版社。
- 和志武1987『納西語基礎語法』雲南民族出版社。
- 和志武2008「納西新文字的制定和試驗推行」『和志武納西學論集』民族出版社, pp.312-321。
- 和即仁・姜竹儀1985『納西語簡志』民族出版社。
- 金星華主編2005『中國民族語文工作』民族出版社。
- 麗江納西自治州教育局・民語委1986『納西文小學課本 語文 第一冊』雲南民族出版社。
- 麗江納西自治州教育局・民語委1988『納西文小學課本 語文 第六冊』雲南民族出版社。
- 麗江縣民族語文編訳室1983「納西文字方案說明」『麗江報納西文版』第3期（1983年5月7日）。
- 麗江縣民族語言文字工作委員會1985「納西文字方案說明」『麗江納西文小報』創刊号（1985年1月26日）。
- 麗江納西自治州民族宗教事務局2000a「來學納西文」『麗江納西文報』第77期（2000年6月8日），p.1。
- 麗江納西自治州民族宗教事務局2000b「納西語濁輔音中的純濁鼻濁分開举例說明」『麗江納西文報』第77期（2000年6月8日），p.4。
- 麗江納西自治州民族宗教事務局2002「納西拼音文記事」『麗江納西文報』第80期（2002年2月8日）。
- LIJAI NAXICEE ZEEZHEEXAI YUVEI XUEILIAIBAI（麗江納西自治州語文訓練班）1982『NAXI GEEZHEE TE'EE（納西文課本）』（油印版）。
- 李即善・和學才1986『牧象女』雲南民族出版社。
- LIZIQSAIL（李即善）1983『NAQXI TE'EE KOLBEI（納西文字課本）』LILJAIXAIL MIQCEEFYUWEIQ BIAIYIFSHEEF（麗江縣民族語文編訳室）（油印版）。
- 羅常培・傅懋勳1954a「國內少數民族語言文字的概況」『中國語文』1954年3月号（第21期），

pp.21-26。

羅常培・傅懋勛1954b「国内少数民族語言文字の概況」『国内少数民族語言文字の概況』中華書局, pp.29-45。

馬効義2011a『新創文字在文化變遷中的効能與意義闡析——以哈尼、傣僳和納西族為例』民族出版社。

馬効義2011b「納西族新創文字在教育教學中的應用及存在的問題」『中国少数民族新創文字應用研究』民族出版社。

馬効義・朱麟2009「納西新創文字研究總述」『湖北民族學院學報（哲學社會科學版）』2009年第5期。

雲南民族工作40年編寫組1994『雲南民族工作40年（上下冊）』雲南民族出版社。

雲南省編集組1988「納西族的社会歷史及其方言調查」『納西族社会歷史調查（三）』雲南民族出版社, pp.118-193。

雲南省地方誌編纂委員會・雲南省少数民族語文指導工作委員會1998「三 拼音文字」『雲南省誌 卷五十九 少数民族語言文字志』雲南人民出版社, pp.345-346。

雲南省少数民族語文科學討論會1957a「關於納西語言文字問題的彙報」。

雲南省少数民族語文科學討論會1957b「納西族拼音文字方案（草案）」。

王麗梅2018「試論納西拼音文的創制及發展」『遼寧教育行政學院學報』2018年第5期, pp.86-92。

玉龍納西族自治縣民族宗教事務局2008「納西語拼音文字方案（修訂草案）建議稿」（未公刊資料）。

趙慶蓮2001「納西族語言文字現狀、發展趨勢及對策」『雲南民族語言文字現狀調查研究』雲南民族出版社。

中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員會文化宣伝司1992「納西文」『中国少数民族文字』中国藏学出版社, pp.214-218。

中央民族学院語文系第五教研組編1960『納西語講義（58-60）』（油印版）。

岡本雅享2008『中国的少数民族教育与言語政策（増補改訂版）』社会評論社。

庄司博史1987「文字創製・改革にみた中国少数民族政策」『国立民族学博物館研究報告』12（4），pp.1181-1214。

庄司博史2003「中国少数民族語政策の新局面——特に漢語普及とのかかわりにおいて」『国立民族学博物館研究報告』27（4），pp.683-724。

- （1）近年書かれた論文に王麗梅2018、馬効義・朱麟2009があるが、全体的な研究状況の概説や近年の使用状況を述べるにとどまっている。
- （2）「ラルコ文字」と記されることもあるが、実際のナシ語の発音はRerkoもしくはRerkaであり、「ラコ文字」もしくは「ラカ文字」と記するのが適当である。
- （3）ナシ語について全般的に記された中国少数民族語言簡志叢書『納西語簡志』（和即仁・姜竹儀1985）では、この表記法の説明として「拼音文字」とだけ題されている。
- （4）これを転載した『納西族社会歴史調査（三）』（雲南省編集組1988, p.191）では、この表記法の説明に「納西族文字方案」と題され、その本文中ではやはり同様の不統一が見られる。また、これに先立つ1983年5月7日に発行された『麗江報納西文版』第3期第1面に掲載された「納西文字方案説明」では、「《納西族文字方案》を《納西文字方案》とし、まず麗江県において試験的に普及する」と記されているが、これは「《納西族文字方案》（草案）を《納西族文字方案》とし、……」の誤りである。
- （5）庄司1987や岡本2008など。
- （6）羅常培・傅懋勛1954a, pp.25-26。羅常培・傅懋勛1954b, pp.42-43。
- （7）和志武1987, p.1、麗江納西族自治縣民族宗教事務局2002。

- (8) 現在、麗江市玉龍納西族自治県黄山鎮長水村に所在する和志武の生家に開設された展示館では、この教科書を含む和志武の著作や資料が展示されている。
- (9) 傅懋勛1959,p.2、金星華主編2005,pp.41-43。
- (10) 和志武1987,p.1、麗江納西族自治県民族宗教事務局2002、和志武2008,p.313。
- (11) 「語音・語法部分」と「詞彙部分」の二部からなり、表紙には共に「1959年5月・北京」と記されている。
- (12) 雲南省少数民族語文科学討論会1957。
- (13) 和即仁2006,p.145、傅懋勛1983,p.1、金星華主編2005,p.222、雲南民族工作40年編写組1994,p.385。
- (14) 和志武1987,p.1、麗江納西族自治県民族宗教事務局2002。
- (15) 和即仁2006,p.149、雲南民族工作40年編写組1994,pp.385-386。
- (16) この時期の経緯については、庄司1987,pp.1200-1202、岡本2008,pp.131-133,319-320に詳しい。
- (17) 和志武1987,p.1、麗江納西族自治県民族宗教事務局2002。
- (18) 和志武1987,p.1。
- (19) 麗江納西族自治県民族宗教事務局2002。
- (20) 麗江納西族自治県民族宗教事務局2002。
- (21) 玉龍納西族自治県民族宗教事務局2008。
- (22) 麗江納西族自治県教育局・民語委1986、和志武1986、李即善・和学才1986。
- (23) この表記法の普及の試み、及びその問題点について論じたものとして趙慶蓮2001がある。また、教育現場での使用状況の研究やその概説として、馬効義2011a；2011b、馬効義・朱麟2009がある。
- (24) 広西僑文工作委員会翻訳1958、傅懋勛1959,p.5。貴州省民族語文指導委員会編1957,p.151。
- (25) 雲南省少数民族語文科学討論会1957a、雲南省編集組1988。ただし、近年では麗江壩方言の地域でもこの区別は曖昧なものになってきている。ちなみに、表記法とは直接に関わらないが、『納西語簡志』（和即仁・姜竹儀1985）に示された音韻体系では、記述の標準点を麗江壩方言が話される麗江県青龍郷（現在の玉龍納西族自治県黄山鎮長水村）としているので、2系列の子音を区別する体系となっている。注8にも述べたように、当地は和志武の出身地である。
- (26) この2系列の子音の区別がある地域のナシ族にとっては、二つの子音が書き分けられないという問題が感じられるため、後にそれを補う案も提示され（麗江納西族自治県民族宗教事務局2000b）、そこでは2系列の子音をbb/nb, dd/nd, gg/mg, jj/nj, zz/nz, rh/nrと書き分ける。これは60講義の方式と四つは全く同じであり、異なる二つも微細な修正を加えただけであるので、おそらく60講義とその前段階の案を復活させたものであろう。
- (27) 注8に述べた和志武の生家に開設された展示館には、1953年10月の表記がある『53-56級 納西語講義』が展示されており、これが『納西語講義（58-60）』の前段階のものであろう。内容は確認できなかったが、おそらく1950年代前半の教材を引き継ぎつつ、和志武が纏めていたと思われる。
- (28) タイトルは『納西語課本』の意味。著者名などは全てナシ語表記のみ。
- (29) 和志武1987,p.2。
- (30) 雲南省編集組編1988,pp.191-193。該当部分は1985年11月16日付の後記あり。
- (31) 中国社会科学院民族研究所・国家民族事務委員会文化宣伝司1992。
- (32) 和即仁・姜竹儀1985,pp.130-134。また、これを基にして記述していると思われるものに、雲南省地方誌編纂委員会・雲南省少数民族語文指導工作委員会1998がある。
- (33) 和志武1987,pp.1-16。

- (34) 玉龍納西族自治県民族宗教事務局2008。ちなみに、2003年に行われた行政上の変更により、かつての麗江地区（麗江ナシ族自治州、寧蒗イ族自治州、永生県、華坪県の四県を含んでいた）は麗江市となり、その中心地であった大研鎮と幾つかの郷が「古城区」、旧麗江ナシ族自治州内のそれ以外の地域が、「玉龍ナシ族自治州」となった。
- (35) 和学光2009,pp.1-21。
- (36) 和学光氏による『納西語漢語詞典（試用）』（2013年）では、さらにhn,uerという綴りが追加されている。
- (37) 単母音 [ɤ] と同じ記号を用い、環境によって読み分ける。
- (38) 単母音 [ɤ] および子音 [v] と同じ記号を用い、環境によって読み分ける。
- (39) 母音をaとする場合の例。同書には声調の表記について独立した記述がないが、[33]、[21]、[55] 調については、用例から見出すことが出来る。[13] 調のみ用例がないが、この表示方式がほぼ80初期に受け継がれてることから、この表記と推測される。
- (40) 和即仁2006には、改訂された方案の全文は記載されていないため、これ以外の規則については不明である。
- (41) 前節にも述べたように、この改訂の当初案では、大文字、連写規則、移行規則が示されており、その内容は57草案とほぼ同一である（文のタイトル、書名、標語は全て大文字で綴るという点のみ異なる）。
- (42) ページ内の文字の位置などについては省略した。
- (43) '83修訂で示されたiuで始まる母音だけでなく、iaiaiなどのiで始まる複合母音にも拡大されている。実際の出版物ではここに不統一が見られていた。
- (44) 和学光2009,p.2。
- (45) ナシ語教科書『語文 第六冊』（麗江納西族自治州教育局・民語委1988）には、いくつか規則の解説があり、その中に分かち書きについての言及がある（pp.23-25）。そこでは、「一つの語であれば、続けて書かねばならない」とし、4行の文章で7語が例示されている。ここからも、ナシ語の読み書きを示す教科書であればなおさら、分かち書きの問題が避けられないものであることが分かる。
- (46) 2016年には「納西族語言遺産系列叢書」として、和潔珍・和秀清・和繼先・肖煜光『納西族劳作歌選』、和潔珍・和秀清・和順林・和洪生『納西族長調選（1）』、和潔珍・楊一紅・和潤英・和正鈞『納西族長調選（2）』、和潔珍・木誠・和学俊・楊文涛『納西語台詞選』（いずれも雲南民族出版社）が出版されている。